

群 教 セ	G10 - 01
	令 2.275 集
	道徳

# 道徳的価値を理解し、自分との関わりで 深めることのできる児童の育成

—自分の考えを視覚化して整理し、表現することを通して—

特別研修員 服部 こずえ

## I 研究テーマ設定の理由

小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 特別の教科 道徳編において、道徳科の目標の中に「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」とある。

第 1 学年の児童は、道徳的価値についての簡単な判断をすることはできるが、自分の考えを書いたり、表現したりすることに対しては、苦手意識をもつ傾向が見られる。そこで、展開前段に、児童にとって分かりやすい喜怒哀楽などの表情を描いた「表情イラスト」を活用して、視覚的に自分の考えを整理させる。展開後段では、表情イラストを手で持って友達に示すことのできるプレート(表情プレート)を活用し、互いに見せながら理由を話し合ったり、全体で意見交流したりして自分の考えを表現させる。その中で、自分と似ている意見や異なる意見など、多様な感じ方や考え方に接することにより、自分の考えを広げ、道徳的価値を自分との関わりで深めることができるようになると考え、上記の通りテーマを設定した。

## II 研究内容

### 1 研究構想図



## 2 授業改善に向けた手立て

**手立て1** 自分の考えを整理するための、表情イラストを用いたワークシートの工夫

**手立て2** 自分の考えを表現するための、表情プレートの活用

### 手立て1(表情イラストを用いたワークシート)について

第1学年の児童の発達段階としては、何事にも興味、関心を示し意欲的に行動することが多く、単純な善悪などの判断をしたり、簡単な問い掛けにすぐ答えたりすることはできる。しかし、物事を考える経験が浅く「登場人物はどういう気持ちか」「どうしてそう思ったか」等の発問に対して自分の考えをもつことが困難な場合があるため、考えることをより分かりやすくする必要がある。

そこで、教材を通して道徳的価値についての考えをもつ場面において、まずは板書と整合性をもったワークシートを作成し、教材文を視覚的に理解することができるようにする。次に、登場人物の気持ちを表情イラスト(分かりやすく喜怒哀楽を表現したもの)から選ばせ、自分の考えを視覚化して整理させ、「なぜ選んだのか」を問うことにより、考えることを分かりやすくする。話し合いの中で登場人物の気持ちにせまる発言やつぶやきを拾い上げて共有し、道徳的価値の理解を深められるようにする。

### 手立て2(表情プレート)について

第1学年の児童は、まだ集団生活に十分慣れていないために、引っ込み思案になったり物おじしたりすることも少なくない。また、自分の考えを相手に分かりやすく書いたり表現したりすることも難しい場合がある。そこで、道徳的価値についての考えを交流する場面において、自分の意見を相手に分かるようにするために、手立て1で選んだ表情イラストを自分の考えとして相手に示せる表情プレートにし、ペア同士で見せ合ったり、全体に示して交流したりする。意見交流をすることにより、自分とは違う表情を選んだ児童の意見を聞いたり、同じ表情を選んだ場合でも理由が違うことに気付いたりし、考えを深めることができる。その上で、授業者が補助発問をしたり、本時のめあてを振り返らせたりすることによって、児童が道徳的価値への理解を自分との関わりで深めることができるようにする。

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 成果

- 表情イラストを基にして、児童が自分の考えを視覚化し整理することによって、すべての児童が自分の考えをもってペアで交流することができた。
- 表情プレートを活用することにより、普段発言が少ない児童も、自分の考えを表現することができ、意見交流に参加することができた。自分の考えをペアの相手や他の児童に嬉しそうに見せ、話し合う姿もあった。また、表情プレートを2本持つ児童の姿も見られ、それぞれの表情プレートに理由をもち、多面的・多角的なものの見方に気付くことができた。さらに、授業者も児童の考えを一目で把握することができるため、意図的指名をしたり、発言できない場合に代弁したりして、様々な意見交流につなげることもできた。

### 2 課題

- 表情を選ばせる際には、一時の表面的な考えにこだわる児童もおり、考えさせたい道徳的価値までたどりつけない場合もあった。その場合には授業者が意図的に補助発問をして、道徳的価値を明確にする必要がある。
- 児童が道徳的価値を自分との関わりで深めるためには、児童自身が意識して自分と友達の考えを比較しようとするのが大切である。そのために、授業者は表情プレートだけではなくハンドサインを併用し、「同じ意見」「違う意見」「気付かなかっただけれど賛成」など意識させて、更に考えを深めることができるようにする必要がある。

## 実践例

- 1 主題名 ただしいことはすすんで 内容項目 A-(1) (第1学年・2学期)  
教材名 「ぼくはいかない」 光文書院「ゆたかなころ1ねん」

## 2 本主題について

### (1) ねらいとする道徳的価値について

人として行ってよいこと、社会通念として行ってはならないことをしっかりと区別したり、判断したりする力は、児童が幼い時期から徹底して身に付けていくべきものである。また、よいこと、正しいことについて、人に左右されることなく、自ら正しいと信じることに従って、誠実かつ謙虚に行動することは、人として重要なことである。自分で行ってよいこと、行ってはならないことを見極め、よいことを進んで行おうとする態度を養うことが大切である。

### (2) 児童の実態について

第1学年の児童は、周囲の大人の言動により、何がよいことで何が悪いことか、素直な感性で受け入れており、善悪の区別が認識されてきている。また、仲間との関わりを築き、学級集団の一員としての意識が強くなってきている。周りの様子を見ながら行動したり、一人だけ目立つことを避けようとしたりし、よいことだと思っても、周りを気にして一人で行動を起こすことを躊躇する姿も見られる。そこで他者からの指示を待つのではなく、よいと判断したことを積極的に行おうとする態度を育てたい。

### (3) 教材について

本教材は、主人公が、危険な場所に子供だけで行こうと友達に誘われるが、何がよいことで何が悪いことか考え、友達に「よわむし」と言われながらも、「いけないことはやらない」と相手に伝えることができる話である。主人公の心の葛藤や思いを感じ取ることを通して、児童が正しいことをすることのよさに気付き、よいことを進んで行おうとする態度を養うことができる教材である。

## 3 本時及び具体化した手立てについて

展開前段で、教材から登場人物それぞれの気持ちや考えを明確にしたり、表情イラストから感情を選ばせたりすることにより、主人公の心を視覚的に捉えさせ、葛藤していることに気付かせた。次に、誘いを断った主人公の気持ちを表情イラストに表すことにより、道徳的価値についての自分の考えをもたせた。ペアでの交流、全体交流では表情プレートを活用して互いの意見を伝えたり聞いたりすることにより、児童が正しい判断をし、正しい行いをするためには何が必要かを考えられるようにした。

### 手立て1 自分の考えを整理するための、表情イラストを用いたワークシートの工夫

主人公の気持ちを考えさせる場面では、表情イラストを選ばせることによって自分の考えを視覚化し、理由を問うことによって児童が自分の考えを整理できるようにした(図1)。

### 手立て2 自分の考えを表現するための、表情プレートの活用

自分の考えを表現することは、第1学年の児童には難しい場合がある。そこで、表情プレートを活用して自分の考えを表現することにより、言語化しなくてもペア、全体で意見交換をすることができるよう工夫した。自分と似ている意見や異なる意見など、多様な感じ方や考え方に接して自分の考えを広げ、深めることができるようにした(図2)。



図2 表情プレート



図1 表情イラストを用いたワークシート

#### 4 授業の実際

導入では、児童が普段の学校生活できまりを守れていない「廊下を走ってしまうこと」を挙げ、「いけないことだと分かっているとしてもしてしまうのはなぜだろう」と疑問をもたせることにより、これから考える道徳的価値への方向付けを行った（図3）。

大型テレビで場面絵を映しながら教材文の朗読を流し、児童が教材の内容を理解できるよう配慮した。



図3 提示したイラスト

#### 手立て1 自分の考えを整理するための、表情イラストを用いたワークシートの工夫

基本発問では、危険な川へ遊びに行こうと誘った友達と、誘われた主人公それぞれの気持ちや考えを明確にし、教材文の流れを理解できるようにした。また、五つの表情イラストから主人公の気持ちを選ばせて視覚的に捉えさせることにより「行きたい気持ち」「どうすればよいか困る気持ち」「行ってもいけないと思う気持ち」等の様々な気持ちがあることに気付かせ、葛藤していることを理解できるようにした。数名の児童は、迷いながらも表情イラストを複数選び、主人公の葛藤に目を向けることができた（図4）。

中心発問では、誘いを断った主人公の気持ちについて考えさせた。様々な気持ちがあり分らなくなる児童や、一人では思い付くことができない児童もいるが、分かりやすい表情イラストから選ばせることにより、自信をもって考えることができた。ただ、表面上の気持ちにこだわる児童もいるため、主人公が「むねをはった」ことをおさえたり、授業者が簡単な言葉で言い換えたりして、道徳的価値からずれないように配慮した。

考えることが明確になることにより、どうすればよいか児童が考え込む場面が減り、全員が表情イラストを選んで登場人物の気持ちを想像することができた。さらに、その理由を考えさせる場面では、どうしてその表情イラストを選んだのかを簡潔な言葉で表し、自信をもって書くことができた（図5）。

登場人物の気持ちを表情イラストから選ばせ、考えをもたせる。表情は一つにしぼらなくてもよい。

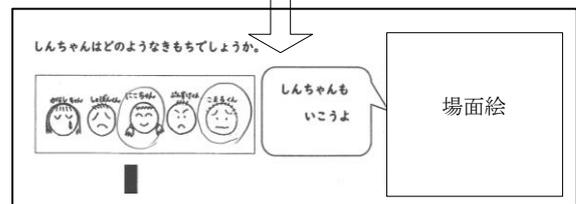


図4 表情イラストを二つ選んだ児童のワークシート

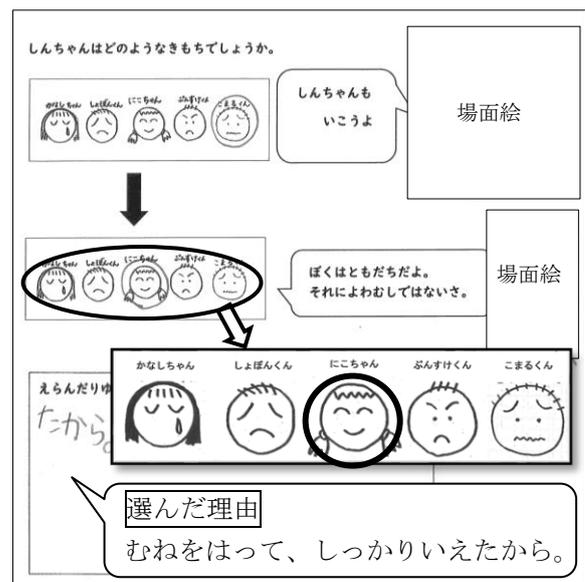


図5 児童が選んだ表情イラストとその理由

#### 手立て2 自分の考えを表現するための、表情プレートの活用

自分が選んだ表情イラストの表情プレートを活用して意見交流を行った。

意見交流では、初めはペアで表情プレートを見せ合った。全体では発言できない児童も、普段から話すことの多い隣の席の児童と進んで表情プレートを見せ合いながら、「同じにこちゃんだね」「ぶんすけくんにしたのはどうして？」等共感し合ったり、簡単に聞き合ったりしてそれぞれの考えに触れることができた（図6）。



図6 ペアでの意見交流の様子

次に全体交流を行った。まず、表情プレートを示させることにより、自分の考えを簡潔に表現させた。周りを見回して他の児童の考えを確認する児童もあり、自分以外の考えを知りたいという意欲が見られた（図7）。



図7 全体での意見交流の様子

意見交流では、表情ごとに分類しながら意見を言わせたり、表情プレートを示させたりして自分の考えの変容にも気付かせながら進めた。自分の意見に自信がもてず不安になる児童もいるが、「友達と同じである」という発言をする姿や「なるほど」と言いながら「その考えには気付かなかった」という発言をする姿が見られた。

意見交流を通して、同じ意見の友達がいることや、違う捉え方をした友達もいるなど、それぞれ考え方は同じではなく、違うということを理解することができた。また、違う表情プレートを示した友達の意見を聞くことにより、「自分とは違うけど、そういう考えもあるのか」「初めて気付いた」という気付きが生まれ、多面的・多角的な考え方へと発展することができた。

その上で、「どうしたら、よいと思うことを進んでできるようになるのでしょうか」と質問し、本時のめあてをもう一度考えさせた。友達の意見を聞いて思ったことをワークシートに追記したり（図8）、「自分のこと、友達のことを考える」と発言したりすることができた。

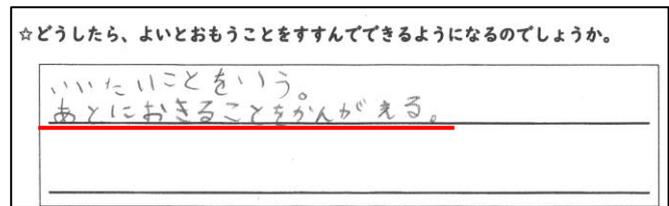


図8 意見交流の後、追記した児童のワークシート

終末の場面では、導入で示した「いけないことだと分かっているのにどうして廊下を走ってしまうのか」を考えることに戻り、道徳的価値を自分との関わりで深められるようにした。児童からは「走ってはいけない。きちんと、やろうと思う」「走りたけれど、がまんする」等の意見が出た。また、「順番を抜かされた場面ではどうするか」についてイラストを基に考えさせ、これからの生活に生かしていこうとする態度を示させた。

## 5 考察

手立て1の表情イラストによって、児童全員が交流前に自分の考えをもち、ワークシートに記入することができた。自分の考えを視覚化して整理させることにより、児童が何を考えればよいか明確になったためと考える。また、登場人物の気持ちを想像して児童たちがつぶやいたり、発言したりすることができ、表情について話し合う姿も見られた。

手立て2では、表情プレートを見せ合うことによりペアでの意見交流、全体での意見交流を行った。うまく自分の考えを書けなかったり、発表に対して消極的だったりする児童も、自信をもって表情プレートを見せ合い、自分の考えを表現していた。他の児童の意見を聞いた際には、「気付かなかった」「そういう意見もあるんだね」などの発言も多く聞かれ、自分と友達の意見を比較し、多面的・多角的な考えに発展することができた。

今回の研究では、表情イラストや表情プレートを活用し、児童が視覚的に考えを整理したり表現したりする展開に重点を置き、授業改善を図った。ただ、表情プレートを見せ合うだけでは児童が自分との関わりで考えを深めることはできないため、様々な工夫が必要である。導入では、自分との関わりで考えられるような身近な問題を取り上げ、課題として提示することである。展開では、ペアや全体交流の後に「その考えに賛成」や「気付かなかったけどそうだね」などの意思表示ができるハンドサインを示したり、考えが変わった場合には消さずに色鉛筆で書き足したりすることである。終末には、今後の自分の生活に生かしていこうとする気持ちをもたせるために、課題についてもう一度考える場面を設定することである。

これらの手立てを講じることにより、児童がより一層道徳的価値を自分との関わりで深めることができるようになると思われる。